

フォトセンター

高林 克己

昭和46年に病院長であった肺外科（現在の呼吸器外科）香月秀雄教授の発案により、第二外科（現在の食道・胃腸外科）の写真技師であった岡本惣三郎氏を技師長に発足した。（仮設置）スタッフは写真技師2名、レタリング技師1名であった。発足当時、手術映画の撮影、手術・標本のスライド撮影、学会発表スライドの作成などが業務であった。手術映画はビデオカメラやデジタルカメラなど無く、16ミリシネカメラで主に食道癌、肝臓癌、肺癌等を撮影した。手術室にやぐらを組んで撮影をし、その後1600～2000フィートに及ぶフィルムの医師立会いで編集、仕上げの確認と1本仕上げるのに時間を要した。学会発表スライドにおいても当時はパソコンなど無く、手書きの原稿をレタリング技師がスライドの比率に合わせて書き直した原稿を撮影してブルースライドを作成していた。

新病院に移転し、整形外科の写真技師2名、第二外科のレタリング技師1名が加わり、写真技師5名、レタリング技師2名の7名となった。業務的には整形外科の側弯症や膝関節の患者が増え、学会発表用のX線の白黒プリント等大幅に増加した。

昭和62年4月院内措置ではあるが設置が認められる。平成になり、次第にビデオカメラ、パソコン、

デジタルカメラが普及してきた。16ミリ映画もビデオに変わり手術室の無影灯の中にカメラが設置され、簡単に撮影が可能になった。パソコンも文字やグラフがきれいにプリントされる様になり、レタリングが不要になる。その後、急速にパソコン、デジタルカメラの性能が向上、プリント作業が減少した。平成15年頃暗室などが不要となり、スタジオとスタッフルームに縮小した。

平成17年10月フォトセンター院内措置を撤廃し、中央診療施設等部門として認められる。現在は高林克己企画情報部長（兼任）をセンター長に三橋技師長、芝崎技術専門員、石村技術員（メディカル・イラストレーター）のスタッフで患者、手術・標本の撮影を主に、医療事故防止セミナー等の職員研修や講演をデジタルビデオで撮影、編集し、各種素材にダビングをして、ビデオセミナーとして放映可能にしている。また手術画像の不要な情報を取り除き、必要な情報に特化し、洗練させてわかりやすく解説するメディカルイラストの作画も行っている。フォトセンターはより良い画像・映像を医師・看護師・コメディカル等に提供し、研究・教育・職員研修などに寄与している。

（たかばやし かつひこ）